赤城南麓民家における平面と構造の 年次的変遷について (Ⅱ)

——四間取民家について——

正 会 員 桑 原 稔*

1. はじめに

(1) 新しい民家研究の始まりと関東地方の民家

日本民家の研究は戦後特に大量観察によって、間取・構造などの階層的分布、地域的分布を明らかにしようとする調査方法が主流となり、やがて復原と編年の操作を行い、それによって各時代、各階層におけるその地域の民家の代表的様式を捕えることが、民家研究の基本的な流れになり、現在に至っている。そして最近では文献的研究もいくつかみられ、成果をあげている¹⁾。

戦後、関東地方において大量観察と復原と編年の操作による新しい民家研究を、いち早く開始したのは横浜国大の大岡研究室であった。それは昭和 31 年～37 年にかけて、神奈川県下の民家を対象に調査されたもので、その成果は 2 冊の報告書²⁾にまとめられている。それによれば、この地方で整形四間取が普及するのは 19 世紀に入ってからで、17・18 世紀の大部分の遺構は三室広間型に復原され、わずかに例外として 17 世紀に遡る一上位階層の遺構が始めから、整形四間取であった。また 17 世紀に属する古い三室広間型では寝室が閉鎖的で、ヒロマに向って押板と帳台構えがつくことも明らかにされた。

関西では昭和 32 年以降 41 年まで、大阪市大の浅野研究室によって、府下の民家調査が開始された。大阪府は大部分が整形四間取民家の分布地域である。しかし南部泉南地方で発見された喰違三間取は全国的に広く分布する三室広間型や、大阪府北端に分布する妻入り縦割型と比べて、これらと別系統であることを示し、大阪府下の平垣部に江戸初期から分布する整形四間取と極めて近親性に富むことが明らかとなつて、府下にみられる整形四間取の先行形式と考えられた³⁾。

再び関東の民家研究についてみると、埼玉県の場合土間沿いの表の室を 3 間四方に取る古四間取を三室広間型の先行形式とし、古四間取は 17 世紀末には広間型に変化し、以後三室広間型が主流となる。そして四間取は広間型の機能分化の結果生まれたものとし、18 世紀中頃に

は出現し、明和 7 年 (1770) の江ヶ崎村では全戸の一割五分が四間取になっていた⁴⁾。

茨城県の民家は、地域的に大きく 3 つに分けられる。那珂川は県の南北を分ける重要な境となっており、これ以北は山地で曲り家が多い。一方県央の水戸西方には分棟型があり、県南の平野部では直屋になっている。直屋は広間型の系統で、南に接する千葉県民家との類似性が指摘され、整形四間取は 18 世紀から現われている⁵⁾。しかし、茨城県では典型的な三室広間型は一般的な形式としては用いられず、整形四間取の古い例は元禄元年 (1688) に認められ、曲り座敷になっているので、寝室は広間の裏側に設けられる。このような性格の整形四間取は千葉県北部地方においても広くみられる。これは年代的にも、室の使われ方からみても三室広間型の発展してできた整形四間取とは内容を異にしており、千葉県の調査からみても、この形式が関東の東寄り地域の江戸前期から中期にかけての、農家の一つの基本的間取でなかったかと考えられている⁶⁾。

千葉県の民家は地域によってかなり異なった間取をもっている。北部の下総から中部の上総にかけての地域は、ほぼ同じ系統の間取である。しかし南部の安房地方には、かなりはっきりした特色を持つ分棟型の民家が分布している。また九十九里浜沿岸には、安房と異なる形式の分棟型がある。そして中規模民家の基本的間取は、いわゆる三室広間型のタイプでなく、4～5 室構成の A・B・C の 3 形式を基本形式にしている⁷⁾。

栃木県に関する民家調査の報告は、これまでまとめたものとして刊行されていない。日光社参史料からみた一連の文献的研究があるので、今後それらの地域における民家調査の報告が望まれる。しかし中規模農家の例として三室広間型 (国指定重文羽石家住宅、元禄 2 年棟札) が存在することから、関東北部の平坦地域における中規模農家の基本的間取が、三室広間型であったことを示唆するものであらうと考えられている⁸⁾程度である。

群馬県における大量観察と復原と編年の操作による新しい民家調査報告は、昭和 43 年「群馬県西部と北部の民家遺構について⁹⁾」が始まりで、その後「利根郡白沢

* 豊田工業高等専門学校 教授

(昭和 56 年 4 月 2 日本稿受理・討論期限昭和 57 年 6 月末日)

村の民家遺構について⁹⁾・「赤城南麓民家における平面と構造の年次的変遷について (1)・(2)・(3)¹⁰⁾」・「藤原地方の民家遺構について¹¹⁾」・「邑楽郡明和村の民家 (1)・(2)¹²⁾」・「桐生市梅田町の民家 (1)・(2)¹³⁾」等がある。

昭和 43 年には、県内全域にわたって民家緊急調査が行われ、その結果は「群馬県の民家¹⁴⁾」に収録されている。この他「中之条町の滅びてしまった一民家¹⁵⁾」は、解体時に柱柄から出た墨書によって享保 4 年の建造が明らかになった喰違四間取を、痕跡図を示して報告したものである。「群馬県桐生市にある 彦部家の屋敷と家屋について¹⁶⁾」は、中世豪族彦部家の母家と付属建物の復原と建造年代推定および濠をめぐらし、土塁で囲まれた屋敷の造成年代を推定したものである。また「入沢家の家歴と旧屋について (1)・(2)¹⁷⁾」は榛名山東麓の渋川市郊外にあった 17 世紀前期の三室広間型遺構を解体移築した過程を報告したものである。「天田家の屋敷と家屋について¹⁸⁾」は、前橋市南部に今でもみられる環濠屋敷の一つである天田家を取りあげ、その成立年代を推定したものである。

文献的研究は 2 例¹⁹⁾あり、両者共村方文書による近世民家の報告例である。1 例は山くずれによって家屋が倒壊した 8 戸について、母屋の規模や家族数、耕地高を書きあげ、役所にさし出した文政 9 年の古文書を整理して報告したものであり、他は宝永 3 年の宗門人別家別帳の内容を整理して報告したものである。

(2) これからの民家研究と本研究の意義

日本民家の研究は、昭和 30 年代前半に始まった前述の新しい方法によって、その後日本各地の調査結果が豊富に発表さされるようになって、輝やかしい発展をとげた。また全国にわたって行われた民家緊急調査²⁰⁾によって、各県単位で一応特色ある民家が保存され、緊急調査報告書や修理報告書等も多数刊行されている。その結果現在では、全国的に間隙をかなり埋めることができた。しかし日本民家を極める最も大切な研究は、むしろこれからであろう。すでに昭和 41 年、大河直躬博士が提唱しておられるように、これからの民家研究は精密な技術を下敷きにして、① 特定の民家様式の解明、② 民家の構造法の特徴やその発展過程の解明、③ 調査資料の全国的な規模での比較検討²¹⁾、を一層進展させねばならない時期にある。群馬県では昭和 43 年度に民家緊急調査が行われ一応県内全域の調査は終了したことになっている。筆者はその時、一調査員として協力させていただいたのであるが、調査は目的通り緊急にしかも単年度でおこなわれたので、大雑把にならざるを得ない。その結果は地域的にも、一地区における密度においても、甚だしい粗密があり、なお調査のおよんでいない地域も少なくない。

民家をより広い目で比較・検討するには、その前提と

して比較的狭域での平面・構造を考察した、詳細な大量観察資料の積み重ねが必要である。そしてこのような精密な編年研究の集成の結果から、始めて相互に他地域との比較検討が可能になるものと考ええる。しかし現段階では、それを可能にするような資料は、まだまだ少ないといわざるを得ない。このような見地から本稿は、従来大量観察と精密な編年研究の行われていなかった、群馬県央部の間隙をまず埋め、より広域での比較検討に必要な基礎資料を提供しようとするものである。この地方は前稿²²⁾でとりあげたように 17 世紀にまで溯る三室広間型が数棟発見され、新しい三室広間型は 18 世紀末期のものもあった。またこの地方は、時代が下降すると養蚕の影響を受けた、いわゆる赤城型民家の出現をみる特殊な地域である。本稿では三室広間型に続いて、展開されたとみられる四間取民家を取りあげ、主に平面と構造の発展を考察しようとするものである。そしてこれに続く後の稿ではさらに資料を加えて当地に典型的にみられる赤城型の成立過程の解明まで、考察を進めたいと考えており、その基礎資料ともなるものである。

2. 調査遺構の編年

建築年代の判明した調査遺構は 14 棟 (No. 10, 17, 22, 24, 25, 29, 30, 32, 34, 35, 36, 38, 40, 44)、ほぼ推定できるもの 14 棟 (No. 3, 7, 9, 13, 14, 18, 19, 26, 27, 31, 33, 37, 39, 42) であり、全調査遺構に対する割合は 28/44 棟 (63.6%) であった。そこで復原したこれらの遺構の特徴と建造年代不明な民家の様式等を比較・検討して編年の指標となるものを求めて、全体の編年系列をつくると、表—1 のようになる。その結果、大きくみて I→II→III 期の様式編年が得られる。No. 1 については現状平面図と痕跡図をのせ、復原の経過を明らかにしておく。次に各期の遺構について考察する。

3. I 期遺構について

No. 1 梁間 4 間、桁行 9 間、屋根は調査時に南面中央部を高さ約 3 尺切りあげ、寄せ棟造りの赤城型とし棟に 2 個の換気ヤグラをあげていた (写真 1)。これは屋根裏の一部を利用できるよう改造したもので (図—1 断面図)、当初は換気ヤグラなく、前面の屋根も切りあげられていなかった。復原すると (痕跡図・図—2) 当初の平面および断面は図—3、No. 1 のようになり比較的

写真 1 No. 1 井上団次家

閉鎖性の強いものとなる。地元では「変形の田字間取の家」と呼んでいるが、ここではこのような間取を「不整形用字

型」と仮称する。この平面形式は前稿²²⁾で述べた広間型のザシキ裏にコザシキを設けたものである。構造をみると大黒柱と下大黒柱を棟通りに据え、上屋柱の省略が少

図-1 井上団次家現状平面、断面図

図-2 井上団次家痕跡図

ないなど、前稿のⅡ期広間型に近い架構を示している。広間型と比べて異なる点は、広間型の場合いずれも前後の下屋を半間程とっていたものを、当遺構ではコザシキの奥行に合わせて裏側の下屋を1間に拡大していることである。なお大黒柱がチョーナ仕あげとされ、逃げもないことなども古さを示す証拠であり、18世紀初頭頃に建造された遺構と推定される。

No. 2 梁間4間半、桁行10間半で幾分規模が大きい。これは名主の家柄という階層差によるものかも知れない。当家は江戸時代に名主役を勤めた家柄と伝えるだけで遺構の建造年代については何も伝えていない。平面はザスキ²³⁾の裏側に奥行1間のコザスキを設けたものであるが、No. 1と違ってナンドの奥行を2間にしているため、ナンド・デエ境の間仕切線とザスキ・コザスキ境の間仕切線間に1間の喰違を生じている。当地ではこのような間取の家を「喰違間取の家」と呼んでいる。しかし本稿では「喰違四間取型」と仮称する。平面および断面をみると前稿で述べたⅢ期広間型の古い遺構に近い特徴をもっている。例えばナンド・デエ境をトコおよび土壁によって閉鎖しているため、ナンドは喰違部分に設けら

図-3 I期遺構の復原 平面・断面図

れた出入口以外のすべてを土壁で閉鎖されていたものと考えられ、ザスキ表にサマを残していること、および大黒柱と下大黒柱を棟通りに据えていることなどである。当家の建造年代は階層差を考慮した上で18世紀前半頃と推定する。

No. 3 当遺構は上手の妻部およびダイドコの表側と裏側の中程で復原不可能なところがあった(図-3, No. 3)。しかし他の個所は比較的良好に当初の姿を残していた。当家の平面は不整形田字型であるが、裏側の2室(ヘヤとキタザシキ)の奥行をNo. 1よりも広く1.5間にとっている。コザとヘヤ境を土壁で閉鎖しザシキ表にサマを設け、ダイドコと床上との境に建具を入れず、大黒柱がチョーナ仕上げにされ逃げもないなど、前稿のⅢ期広間型の古い遺構に通じる特徴を示している。しかも当遺構にみられる新しい特徴は大黒柱と下大黒柱が棟通りからずれ、コザとヘヤの室境間仕切線上に据えられていることである。これは構造的にみて以後の民家発展に対して大きな意義を持つものと考えられる。すなわち広間型はもとよりこれまで述べてきた遺構はいずれも大黒柱・下大黒柱が棟通りに配置されていた。それは溯れば棟特柱に通ずる構造的意味を持っていた²⁴⁾。しかし当遺構における大黒柱・下大黒柱は構造的な理由よりも、平面的な間仕切の都合に合わせてそれらの位置が決定されるようになったことを示す古い例として特に注目されるのである。当家の伝承によれば建造年代は250年位前まで溯るということであった。復原された建築の特徴等から推して、18世紀前半頃まで溯る遺構とみてよいであろう。

No. 4 当家は喰違四間取型であり、デエ・ナンド境を土壁で閉鎖している。しかしデエの妻側にトコ²⁵⁾とドタナを設けたり、ザスキ表のサマが消滅していることなど新しい特徴も示している。当家の建造年代はNo. 2やNo. 3より幾分下降するものであろう。

No. 5 当家は喰違四間取型である。当家の大黒柱はチョーナで仕上げられ逃げもない。しかしオクリとナンド境の1間を開放し、ナンドはオクリとチャノマの両方から出入できるようになるなど幾分開放的になっている。

No. 6 当家は表側の室より裏側の室の奥行を大きくとった不整形田字型である。大黒柱およびこの左右にたつ柱は土間側をチョーナ、他の面をカンナで仕上げたもので、大黒柱は土間側に逃げている。当家は江戸時代に組頭を勤めた家柄で、それを示す古文書もいくつか存在する。しかし遺構の建造年代を示す記録・伝承等は残していない。

No. 7 当遺構は平面・構造ともNo. 3によく似ており、改造少なく当初の様子をよく残していた遺構の1つであった(写真2)。しかし、次のような点でNo. 3よりも新しい遺構と考える。① オクリ(寝室)はコザ境の

間仕切の半分(1間)を開放し、コザとウラザシキの両方から出入可能になっている。② ダイドコではコエンに接した表側1間を開放しサマを設け、裏側に半間の出入口を設けている。③ 大黒柱はカンナ仕上げで逃げを有している。④ ダイドコ上部の屋根裏利用を考えている。

当家の屋根裏利用についてみると、大黒柱と下大黒柱間のダイドコ上部に限ってサス受梁を省略し、桁行方向の低い位置にミカワバリ²⁶⁾を架け、この上に1間々隔でナラシバリを梁行いっぱい架け渡し、さらにこの上に竹スノコを桁行方向に敷いたものである。

屋根裏への採光窓はなく、サマやトボグチから竹スノコを通して入った光や妻部の千鳥破風から入った光をたよりにするだけである。

当家の建造年代は伝承によれば初代が建ったままであるといい、当主(大正4年生)で12代目になるという。したがって逆算すれば18世紀初頭頃の建造になるが、表-1の編年表にみる前後の遺構との関連から考えて、18世中期頃の建造とみるのが妥当であろう。

No. 8 当家の平面も不整形田字型である。デエの妻側にトコを設け、デエとナンド境の間仕切の半分を土壁にしている。またナンドの裏側半間を開放し、ザスキとチャノマのダイドコ側に建具を嵌めているのも新しい特徴である。さらに当家で注目されるのはウマヤをダイドコの裏側に寄せ、この前面をハタヤと呼びここに機織の場を確保していることである。そしてハタヤの前面には採光用のサマを設けている。こうして機織の場を確保したのも当家の所在する大間々町が織物の産地である桐生に隣接した地域であるので、その影響によるものと考えられる。

No. 9 当家は厳密にいうと表側より裏側の室の奥行が7寸5分ほど狭くなっており、まだ田字型²⁷⁾になりきっていない。しかしその差が少ないので田字型に分類したものである。コザとナンド境の間仕切では土壁が消滅しており、ダイドコの表床上寄りにイトザマと呼ぶ低い採光窓²⁸⁾を設け、この内側をイトヒキバと呼んでいる。イトヒキバにはザグリと称する道具を据えて主に女たちが糸をひいたのだという。さらに当家で注目されるのは特殊な小屋組(図-3, No. 9 断面図)を考案して、大黒柱と下大黒柱を結ぶ線より表側のダイドコ上部および

写真2 No. 7 岩崎ひょう家

オモテザシキ上部の屋根裏を利用できるよう考えていることである。そして前面中央部の屋根軒を幅2間にわたって上

ものである（写真 4）。このようなグシは現在当地内で、ほとんどみられなくなってしまった。しかし古老の話によると草葺民家の大半は昭和初期頃までクレグシであったというから、クレグシはおそらく草葺屋根の雨漏を防ぐ古い手法であったと考えられる。

当家はコザとナンド境およびコザとオモテザシキ前面の開口部に中柱³¹⁾を残している。しかし他の室境では差鴨居を用い、ダイドコとオモテザシキおよびウチザシキ

写真 4 No. 12 萩原宇三雄家

境に建具を嵌めている。当家は復原された建築の特徴等から 18 世紀末期頃の遺構とみておけば無難であろう。

No. 13 当家は田字型である。ナンドの上手 1 間を開放し建具を嵌め、ナンドへの直接採光を計っていたり、屋根の前面中央部を約 3 尺程切り上げ、ここに低い窓を設け赤城型屋根とし、屋根裏利用を考えているなど本百姓としては新しい手法を採り入れている。しかし反面、中柱の省略が少なく、ザシキ表にサマを残し、大黒柱、下大黒柱を棟通りに据えているなど古い手法を残している。当家は伝承によれば初代が建造したものという。位牌によれば初代は「白翁自休居士」で安永 4 年（1775）1 月 27 日に没していることから、およそ 18 世紀中期頃に建造された遺構とみて妥当であろう。

4. II 期遺構について

No. 14 当家は田字型である（図-4、No. 14）。各室境の間仕切に差鴨居を多用し、ダイドコ表の外壁は上手 1 間を開放してイトザマとし、この内側で糸ひきをしたという。当家は現在赤城型屋根とし、屋根裏を利用できるようになっている（写真 5）。しかしこれは中古の改造

写真 5 No. 14 設楽八郎家

によるもので、当初は屋根裏利用を考えていなかった。当主の祖母（天保年間の生れ）の伝承として、祖母の 2 代前の人

No. 15 当家は不整形田字型である。各室境の間仕切に中柱を残し、大黒柱はカンナ仕上げにしているが逃げを有しておらず、屋根裏利用も考えられていない。この

ように当家の建築様式は古風なものを持っている。しかし当家は山奥の極めて辺鄙な行づまりの土地に存在するので、文化の伝播の遅れを考慮して 19 世紀初期頃の遺構と推定しておく。トボグチの左手はイトザマとし、この内側をイトヒキバにしている。

No. 16 当家は表側より裏側の室の奥行を大きくとった不整形田字型である。ダイドコ中央部の表側外壁の桁下に背の低い半間幅の窓を開き、大黒・下大黒柱を結ぶ線より表側に根太天井を張って、6 坪ほどの屋根裏利用を考えている。ダイドコではこれまでにいずれも表側の外壁に接して設けられてきたウマヤを中央部まで後退させ、これによって生じたウマヤの前空間をイトヒキバにしている点は新しい空間利用の方法である。当家は次の No. 17 より古い遺構と考える。

No. 17 当家は仏壇やトダナが室内にはみ出ているが、田字型に入る遺構であろう。コザとヘヤ境およびコザ、オモテザシキの表開口部に中柱を残しているが、本格的な赤城型屋根³²⁾とし、オモテザシキ上部とダイドコの前側半分に根太天井を張って屋根裏を利用している。トボグチの 1 つ上手の柱は抜きとられ、さらにその上手の柱は周囲に板を打ちつけていたため、この個所の復原をできなかった。しかし当主の話によれば親から昔、コエンのすぐ手前で糸ひきをしたことをよく聞いたというので、その部分はイトザマであった可能性が強い。当家は普請張によって文政 7 年（1824）に建てられたことが明らかである。

No. 18 当家は不整形田字型に入る遺構である。コザとヘヤ境およびコザ表の開口部に中柱を残しているだけで、他の室境では差鴨居を用いている。架構をみると上屋梁を頭が当らぬ程度の高い位置に架けることによって、上屋根も高めて赤城型に切りあげた窓高を増し、できるだけ屋根裏の奥まで光を届かせるよう配慮している。当家は江戸時代に組頭を勤めた家柄と伝えており、軒裏をセガイ造りにしているのもそのためと考える。屋号をシンタク（新宅）といい嘉永 3 年（1850）に 83 才で亡くなった岩右衛門が当家を建造して新宅に出た初代であると伝えることから、19 世紀初期頃の遺構と推定する。

No. 19 当家は喰違四間取型である。各室境は総べて差鴨居を用い、中柱を省略している。またトボグチの上手を半間ほど突き出して“ツムギバ”と呼び、ここで糸をひいたという。そしてツムギバの前面は低い位置に縦格子を嵌めた窓とシイトザマと呼んでいる。屋根は赤城型としザシキ上部とダイドコの上屋部分に根太天井を張って、屋根裏を利用している。高梨家は弘化 4 年（1847）2 月に当遺構を買って入居したものといい、その時の譲渡証文を残している。したがって当遺構は 19 世紀前半期に建てられたものとみておけば妥当であろう。なお、

図-4 II期遺構の復原平面・断面図

当家も組頭を勤めた家柄である。

No. 20 当家の平面は田字型でろる。オクリとヘヤ境およびオクリの表側に中柱を残し、ヘヤの上手はすべて開放し建具を嵌めている。トボグチの上手はイトザマとし、この内側をイトヒキバと呼ぶ。当遺構は復原された建築の特徴等から、19世紀中頃に建造されたものとみて妥当であろう。

No. 21 当遺構は不整形田字型の平面である。オクザシキとザシキの表側に中柱を残しているが、他の室境ではすべて差鴨居を用いており、ウチザシキの裏側1間を開放している。そして床上部分およびダイドコロとも裏側の1間通りを除いて桁行すべてに根太天井を張り、前面と左右の屋根軒を上屋桁近くまで切りあげている。当家の建造年代も19世紀中頃とみておけば穏当であろう。

No. 22 当家の平面は不整形田字型であり、屋根を赤城型にしている。赤城型に切りあげた開口部の幅は3間で、オモテザシキとウチザシキの上部および下大黒柱より上手のダイドコ上部に根太天井を張って、屋根裏を利用している。またトボグチの上手にはイトザマを設けている。遺構は先祖の弥一郎(天保14年生)が7才の時建造したというから、嘉永3年(1850)の建造ということになる。

No. 23 当家はウラザシキのスペースを戸棚が喰っているため、ウラザシキの奥行が狭くなっている。しかしナンドの奥行は表側の室の奥行とほぼ近いので田字型に

写真 6 No. 23 石綿啓作家

分類した。屋根軒はダイドコと床上境の位置から下手前面のすべてを切りあげて、屋根裏への採光条件を大幅に改良している(写真6)。復原された建築の特徴等からNo. 22と同時期、すなわち19世紀中頃に建造された遺構とみて妥当であろう。

No. 24 当家は表側と裏側の室の奥行を同寸の2間とし、裏側の室ではこの外側にトコやトダナを設けているので8畳4室の床上空間となっている。デードコではトボグチの上手を半間突き出し、このエンガワ寄りにイトザマを開きイトヒキバを設けている。屋根はコザとザシキ境の上部から、下大黒柱間の前面を長さ5間にわたって切りあげ、開口幅の広い赤城型にしている。そしてコザとヘヤ上をツリテンジョウ(釣天井)とし、この下手すべてに根太天井を張って屋根裏を利用している。当遺構は分家した初代が嘉永5年(1852)に建てたものといい、組頭をしていた初代が末子をつれて分家したものだといふ。

No. 25 当家の平面は田字型であり、No. 24と同様

にコザの表側開口部にだけ中柱を残している。ヘヤの妻側ではトコの奥行に合わせた幅の狭いエンを設けてニシエンと呼び、トブグチの上手2間をイトザマにしこの内側をイトヒキバと呼んでいる。コザとヘヤの天井を鈎天井（棹縁天井）にしているため載れないが、これより下手は妻桁に至るまで根太天井を張って屋根裏を利用している。当遺構は普請張によれば安政5年（1850）12月に建造されたものである。

No. 26 当家の平面は喰違四間取型である。デエ表の中柱も省略されて差鴨居の多用が目立ち、デエに設けられたトコの奥行を3尺（芯々）にとってオクリの妻側にニシエンを設け、平書院を備えている。トブグチの上手2間は No. 25 と同様にイトザマとし、この内側を当家の場合ツムギバと呼んでいる。当家は当地に分家した初代の佐四郎（文化3年生、明治20年没）が建造したものというから、19世紀中頃の遺構とみておけば妥当であろう。

No. 27 当家は田字型である。平面をみるとヘヤとニシエン境に中柱を残すだけで、他の間仕切ではすべて差鴨居を用いている。トボグチの上手に幅1間のイトザマを設け、当家ではこの内側をイトヤと呼ぶ。当家の建造は先祖の孝次郎（天保3年生、明治2年没）によるものというから、19世紀中頃とみて妥当であろう。

No. 28 当家は喰違四間取型である。各室境では差鴨居の多用が目立ち、トブグチの上手2間をイトザマとし、この内側をイトヒキバと呼ぶ。当家は復原された建築の特徴等から19世紀中頃に建造された遺構と推定する。No. 25～28の遺構はいずれも屋根を赤城型にしている。そして No. 27～28は上手一列目の前後の2室を鈎天井とし、これより下手を下大黒柱まで根太天井にし、さらに下大黒柱より下手は一段低い竹スノコ天井にしており、ウマヤニケエと呼んでいる。

5. III 期遺構について

No. 29 当家は田字型で、エンガワを前面（南）から上手妻側（西）へめぐらせている。トボグチの左右にイトザマを開き、ウマヤ前面の方をイトヤ、アガリハナの手前をイトヒキバと呼んでいる。当家は江戸時代に名主を勤めた家柄と伝え、遺構は明治4年に建造されたものといっている。屋根は赤城型である。

No. 30 当家の平面は喰違四間取型である。デエとザシキ表は2本溝の差鴨居を用い、この外側に雨戸用の敷居、鴨居をつけて4間引通しの雨戸としている。トブグチの上手はダイドコを下屋まで突き出しツムギバと呼び前面にイトザマを開く。当家は火災にあい、明治4年に古家を移築したのが現存遺構という。遺構は復原された建築の特徴等からみて伝承の通り、明治4年（1871）の移築建造とみてよいであろう。赤城型の屋根である。

No. 31 当家は不整形田字型の平面である。各室境の

間仕切にすべて差鴨居を用い、デエとザシキ表は No. 30 と同様2本溝の差鴨居にしている。しかしエンガワの外側に雨戸を引いているのは新しい手法である。また出入口は大戸の幅だけ土間を下屋まで突き出し、上部で鈎り内側に押しあげて開く大戸を用いており、これまでの引込戸と異なっている。出入口の上手はイトヒキバと呼び、イトザマも用いている。当家も明治初年に火災にあい、その後建造したのが当遺構であるという。しかし明確な建造年代は伝えていない。

No. 32 当家の平面も田字型である。ダイドコの表側はトボグチとその左手の土壁以外をすべて低いサマとし、ウマヤを裏側へ後退させてその前面に広々としたイトヤの空間を確保し、妻部にウマヤトボーを開いている。屋根はエンガワの中央部からトボグチ右手柱の上部ま

写真 7 No. 32 柿沼彦一郎家

で約6間を切りあげたもので幅および背の高い赤城型にしている（写真7）。遺構は明治3年着工、同6年完成と伝承す

る。

No. 33 当家の平面は不整形田字型である。オクザシキとナンド境やオクザシキの表側に中柱を残し、ザスキ表は3本溝の差鴨居を用いている。しかしチャノマの裏側はすべて開放され、ナンドの裏側も1間を開放するなど、開放性の目立つ平面になっている。大黒柱の位置する桁行通りから表側のすべてに根太天井を張って、屋根裏を利用している。屋根裏への採光は表側の上屋根下に背の低い窓を設け、ここからおこなっている。屋根を寄棟造りにしているため、外観は丁度背の低い総2階造りのような格好をしている。当遺構は当主の祖父（天保12年生、大正8年没）が建ったというから、19世紀末期頃の建造とみておけば妥当であろう。

No. 34 当家も不整形田字型平面である。トボグチの右手をイトヤと呼び、この下手にウマヤを設けている。デエとジャシキの表側は2本溝の差鴨居を用い、エンガワの外側に雨戸を引いている。当遺構は明治8年に古家を移築したものといい、屋根裏利用を考えず平家になっているのも移築されたためであろう。屋根は昭和25年までクレグシであったという。

No. 35 当家は田字型に分類される遺構であろう。オクリやオモテザシキの表側に中柱を残しているが、先祖の権平じいさん（明治12年生）が腹にいる時に建造したものと伝えているので、明治12年に建造された遺構とみておけばよいであろう。屋根は赤城型である。

図—5 III期遺構復原平面・断面図

No. 36 当家は不整形田字型平面である。コザとヒヤ境に中柱を残し、コザおよびザシキ表では3本溝の差鴨居を用いている。しかし遺構は伝承のとおり明治15年に建造されたものとみてよいであろう。屋根は赤城型でトボグチの上手2間をイドザマとし、この内側をイトヒキバと呼ぶ。

No. 37 当家は調査した喰違四間取型の中で、最も新しい遺構と考えられた。デエとザシキ表は2本溝の差鴨居を用い、エンガワの外側に雨戸を引く。屋根は赤城型でトボグチの上手をイトヒキバと呼び、前面にイトザマを備えている。当主(65才)の2代前の人が古家を移築したものと伝えるから、19世紀末期頃に移築された遺構とみておけば妥当であろう。

No. 38 当家のオクリはトコとトダナを設けているため、6畳大の広さになっているが田字型に分類した遺構である(図—5)。各室境の間仕切は差鴨居を用い、コザとザシキの表側では2本溝の差鴨居を使用し、エンガワの外側に雨戸を引く、トボグチの上手1間は土間を下屋まで張り出して、トヒキバの小空間を造り前面にイトザマを開き、ここで2人が糸ひきをしたという。当遺構は普請帳によって、明治19年(1886)の建造が判明している。

No. 39 当家の間取は不整形田字型である。ナンドとオクリ境およびオクリの表側に中柱を残し、ザスキ表では3本溝の差鴨居を用いている。また寄棟平家造りで屋

根裏を利用していない。これらの特徴は当家が移築されたことを裏付けている。伝承によれば昭和45年に75才で亡くなった人の親が、古家を買って移築したものというから、19世紀末頃に移築された遺構であろう。なお当遺構はトボグチ下手の土間を下屋まで拡張しハタヤと呼び、ここで機織をしたという。

No. 40 当家の間取も不整形田字型である。4室の境界となる10個所の間仕切ではすべて差鴨居を用い、裏側にも縁側を設けてウラエンと呼んでいる。ダイドコ表側のほぼ中央の上屋桁通りに大戸を釣り、この大戸を内側に押しあげて開閉する。トボグチの左右は土間を下屋まで張り出し、イトヒキバと呼びウマヤをダイドコに設けていない。屋根軒はNo. 23と同様に土間部分の前面上部および下手妻側を切りあげている。そしてダイドコ上部に限って根太天井を張り、屋根裏を利用している。

No. 41 当家の間取は、不整形田字型である。トボグチはNo. 40と同様な釣大戸とし、この上手の下屋部分をイトヒキバとしている。屋根はトボグチの上手3間を切りあげた赤城型である。復原された建築の特徴等から、19世紀末期頃に建造された遺構とみてよいであろう。

No. 42 当家は8畳4室の田字型間取である。ダイドコの奥はチャノマから1間半の板の間を張り出している。板の間の手前寄りにイロリを設け、この奥をオカサテと呼んでいる。当遺構はダイドコにイトヒキバを設け

写真 8 No. 42 大山淳一家

ような2階造りを当地方では総2階造りと称している。当遺構は明治中期に建造したものと伝えるので、19世紀末期頃の建造とみてよいであろう。

No. 43 当家の間取も田字型である。オクリとナンド境にトコを設けているのは、エンガワを妻側に廻すためであったと考えられる。ダイドコロはウマヤを奥の方へ設置し、釣大戸にしたトボグチ左右の土間を下屋まで張り出してイトヒキバと称している。外観を入母屋総2階造りにし、棟は芝草をのせたクレグシにしている。年寄がないので古いことを全く聞き出せなかったが、復原された建築の特徴等から、19世紀末期頃の遺構とみてよいであろう。

No. 44 当家の間取も田字型である。チャノマの裏側はすべて開放し、ナンドの裏側も1間を開放して通風・換気のよい間取にしている。トボグチの上手にイトヒキバを設け、チャノマのダイドコロ側に板床を張り出しイロ

写真 9 No. 44 水島松次郎家

遺構は大正3年の建造という。

6. 各期にみられる遺構の特徴

6.1 I期遺構

I期遺構 13 棟の各平面形式別内訳は表—2 のようである。I期遺構にみられる平面および構造の特徴をあげると次のようである。

- ① 床上表側の間仕切は中柱を有し差鴨居を用いない³⁴⁾。またザシキ表にサマを残す場合もある。
- ② ナンド（ヘヤ）は裏側と妻側を土壁で閉鎖する場合が多くトコ・ワキドコ・トダナ等の設備を設けない³⁴⁾。
- ③ デエ（コザ）とナンド（ヘヤ）境は古い遺構の場合土壁で閉鎖され、新しい遺構でも中柱を残す。
- ④ 大黒柱は古い遺構の場合チョーナ（角刃）仕上げ

ていない。しかし屋内のすべてに根太天井を張って、建坪と同じ面積の2階を持っている。外観は写真8のようで、この

表—2 I期遺構の形式別棟数

形式名	棟数
不整形田字型	6
破産四角型	4
田字型	3
合計	13

で逃げもなく棟通りに据えられ、新しい遺構ではカンナ仕上げにされ逃げを有し棟下からずれるようになり、かつこれが定着する。

- ⑤ 屋根裏を利用しない場合が多く、利用している場合でも採光条件

の悪い変則的な架構になる場合が多い。

- ⑥ ダイドコは比較的閉鎖性強く、イトヒキバやイトザマをほとんど見受けない。

- ⑦ エンガワを設けない場合が多い。

- ⑧ コザの幅は内法で 12.05 尺より広い。

以上の特徴を持つI期四間取遺構の建造年代は、18世紀初頭～終末期に至るもので、総括的にみてあまり養蚕の影響を受けていない時期の民家遺構とみてよいであろう。

6.2 II期遺構

表—3 II期遺構の形式別棟数

形式名	棟数
不整形田字型	5
破産四角型	3
田字型	7
合計	15

II期遺構 15 棟の各平面形式別の内訳は表—3 のようである。II期遺構にみられる平面および構造の特徴をあげると次のようである。

- ① 床上表側の間仕切は中柱を持つものから差鴨居3本溝まで。

- ② ナンド（ヘヤ）はトコ・ワキドコ・トダナ等の設備を設けないもの（33%）から、設けるもの（67%）が主流となる。

- ③ ナンド（ヘヤ）の妻側は土壁で閉鎖するもの（53%）から開放して建具を嵌めるもの（47%）への移行期である。

- ④ デエ（コザ）とナンド（ヘヤ）境は中柱を残すもの（47%）から、中柱を省略して差鴨居を入れるもの（53%）への移行期である。

- ⑤ 大黒柱はほとんどすべてカンナ仕上げとされ、逃げを持ち棟通りから裏側へずれる。

- ⑥ 屋根裏利用が一般化し、赤城型が普及する。

- ⑦ ダイドコの表側にイトザマが設けられるようになり、この内側をイトヒキバ、ツムギバ、イトヤなどと呼ぶようになる。

- ⑧ エンガワを設けている場合が多い（87%がエンガワ付）。

- ⑨ デエ（コザ）の内法は 12.00 尺に近づく。

- ⑩ 19 世紀中頃を境に土台が用いられるようになる。

以上の特徴を持つII期四間取遺構の建造年代は、19世紀初頭から明治維新に至るまでのもので、総括的にみて養蚕の民家に及ぼす影響が徐々に増大している様子を窺うことができる。

6.3 III期遺構

III期遺構 16 棟の各平面形式別の内訳は表—4 のようである。調査遺構によればIII期遺構の建造された年代は

図—6 四間取民家の規模分布

表—4 III期遺構の形式別棟数

形式名	棟数
不整形田字型	7
縁違四間取型	2
田字型	7
合計	16

明治初頭から大正3年までである。III期遺構にみられる平面および構造の特徴をあげると次のようである。

① 床上表側の間仕切では差鴨居3本溝(31%)から差鴨居2本溝(69%)へ移行し、これが主流になる。

② デエ(コザ)とナンド(ヘヤ)境は特殊なものを除いて差鴨居を用いて中柱を省略する。

③ 大黒柱はすべてカンナ仕上げとされ、逃げを持ち棟通りから裏側へずれている。

④ 開口部の背が高く、かつ幅の広い赤城型が目立ちまた、表側の桁行の下手半分を切り上げたものや草葺総2階も出現する。

⑤ デエ(コザ)の内法寸法は12.00尺になる。

⑥ 床上ばかりでなくダイドコの開放性が目立つようになる。

⑦ 下大黒柱もカンナ仕上げになる。

⑧ 2階床を簀子板張りにし、棟に換気のためのヤグヲを当初からあげている遺構が目立つようになる。

7. 規模について

各期にみられる四間取民家の規模分布を示すと図—6のようである。I～III期にわたる四間取民家の規模をみると、この間に規模の増大をみるなどの大きな変化はほとんどみられない。すなわち赤城南麓地方における四間取民家の規模は、桁行8～10.5間、梁間4～5間、建坪にして32～52.5坪の範囲に入るもので、比較的小範囲にまとまっている。この大きな原因は極く少数の名主(3/44棟)や組頭(5/44棟)を除いて、四間取民家の大多数が本百姓層の住居であるという、階層的にまとまっていることに起因するものと考えられる。

8. 不整形田字型遺構について

8.1 平面 四間取民家44棟の調査遺構中で不整形

表—5 四間取遺構の形式別棟数

形式名	棟数	割合
不整形田字型	18	41
縁違四間取型	9	20
田字型	17	39
合計	44	100

田字型は18棟(約41%)であった(表—5)。梁間4間、桁行9間の規模を持つものが最も多く、最古の遺構とみられたNo.1は18世紀初頭にまで遡る古いものであった。その特徴は前稿のII期広間型に近い。

すなわち前面に土庇をもつII期広間型のザシキ裏に奥行1間のコザシキを設けたのがNo.1の不整形田字型と

みられる。不整形田字型の各室の機能についてみると、ナンド(ヘヤあるいはオクリとも呼ぶ)は家族の寝室に当てられた室で、デエ(コザともいう)³⁵⁾は冠婚葬祭時の主室として用いられる重要な客室であった。そのためトコやワキドコなどが早くから備えられるのもデエ(ゴザ)であった。ザシキ(オモテザシキともいう)は居間兼軽い来客の接待および床上の仕事場(藁仕事などをおこなった)等に用いられた。このため古い遺構ではザシキにイロリが設けられる。またコザシキは食事室であったと古老の多くはいい伝えている。No.1は大黒柱・下大黒柱を棟通りに据え、上屋柱の省略少なくカマ(釜)柱を残し、ザシキ表にサマも残している。No.1に次ぐ古い遺構がNo.3であった。No.3は裏側の2室(ヘヤとキタザシキと呼ぶ)の奥行を1間半に拡大している。当遺構は大黒柱を長者柱³⁶⁾と桁行方向の同一線上に移し、両者の間を建具で間仕切ったものである。こうして大黒柱が棟通りからずれると、大黒・下大黒柱間に梁を架ける都合から下大黒柱も棟通りからずれることになって、桁行方向の同一線上に再び長者柱・大黒柱・下大黒が並ぶようになる³⁷⁾。このようにNo.3(18世紀前半)以降の不整形田字型における屋内にたつ3本の主要柱(長者・大黒・下大黒柱)はともに棟通りからずれている。この大きな理由は生活の向上による平面計画上の要求からきたものであろう。以上のように調査遺構から推察するところによれば、不整形田字型は広間型から発展したものと考えられ、18世紀初頭から19世紀末期頃まで建造されたもので、表—1の3期に分けた編年区分の各期にわたって平均してみられた遺構である。なお、新しい遺構(18世紀中期以降)のザシキはデエ(コザ)に付随した接客空間(いわゆる続き座敷)としての性格を強くもつようになる。

8.2 構造 No.1の場合、大黒柱・下大黒柱を棟通りに据え、上屋柱の省略少なく2重梁の使用もみられないなど、前稿のII期広間型によく似た架構をしている。また、18世紀前半以降になると前述のように平面の変化にともなって、大黒柱と下大黒柱を棟通りから裏側へずらし、長者柱・大黒柱・下大黒柱を桁行方向の同一線上に据えるのを大きな特徴とする。即ち大黒柱や下大黒柱は以前のように構造的理由によってその位置が決定されるのではなく、間仕切の都合にあわせて決定されるようになったのである。No.7はダイドコ上部のサス受梁を省略し低い位置に架けられたミカワ梁上にナラシ梁を架け、さらにこの上に竹簀子天井を張って屋根裏利用を考えている。しかし採光のための開口部はなく、サマやトボグチから竹簀子を通して入った光や妻部の入母屋

破風から入った光にたよるだけであった。なお当遺構ではザシキ中央部の梁間方向に限って2重梁を採用している。しかし19世紀以降になると2重梁の多用が目立ち、屋根裏利用も拡大し上屋根も高められ、屋根裏を有効に利用するための架構法がとられるようになる。

9. 喰違四間取型遺構について

9.1 平面 四間取民家44棟の調査遺構中で喰違四間取型は9棟(約20%)であった(表-5)。この平面形式の民家は、大間々町で3棟(I期遺構)北橋村で5棟(I~III期遺構)、富士見村で1棟(III期遺構)を調査し、分布地域は客室をデエと呼ぶ地域(山手の地域)と一致している(表-6)。

表-6 上手1列目表側の
室名(四間取)

町名・室名	デエ(客室)	コザ(奥室)	その他(物置)
北橋村	6		
大間々町	11		3
富士見村	2		
宮城村		10	3
前橋市		7	
玉村町		2	
合計	19	19	6

No. 2はこの形式で最古の遺構とみられたものであり、18世紀前半まで遡る遺構と推定された。平面をみると閉鎖性が強く、ザスキ表にサマを残し大黒柱の逃げもない。

広間型のザシキ裏にザシキ幅いっぱいにはわたる奥行1間の室(コザスキとよぶ)を設けた形式であり、コザスキの機能は家族の食事室に該当する。ザスキとコザスキ境では中間に柱をたて、この柱を名付柱³⁹⁾とよび、喰違四間取型の場合19世紀末期頃の新しい遺構になっても、この柱だけは省略されない。そして名付柱とナンド(寝室)の間に奥行1.5尺程度の戸棚を設け、戸棚の上手寄りを仏壇にする。またザスキとコザスキ境の鴨居上部には、ザスキに面してザスキ幅いっぱいには1幅尺程の板を吊って神棚にしている。喰違四間取型の規模をみると古い遺構の場合、梁間は4間のものを多く見受け、新しい遺構になると4.5~5間のものが多くなる。桁行の新旧による差はあまり明確でなく、8.0~9.5間の規模である。このように規模による変化があまりみられないのは、前述したように四間取民家の大半が本百姓層の住居であり、階層差が極めて少ないことによるものであろう。ザスキの機能は居間兼軽い来客の接待および床上の仕事場等であり、ほぼ中央の土間寄りにイロリを設ける。しかし新しい遺構になるとイロリはダイドコへ移されるようになる。

当遺構の場合、発見された棟数が少なく、分布地域も山手寄りの地域であった。18世紀前半頃から19世紀末期頃まで建造されたようだが、新しくなるとあまりみられなくなるようで、16棟のIII期遺構中わずか2棟(いずれも移築)を占めるだけであった。このことから喰違四間取型は当地方の本百姓層の民家形式として主流になることができず、19世紀中期以降は田字型にとって代わられていったものと考えられる。

9.2 構造 この型の古い遺構は外観を軒の低い寄棟造りにし、屋根裏の利用もしていない。また大黒柱・

下大黒柱は前稿のII期あるいはIII期広間型にみられたように棟通りに配され、簡素な構架材で小屋組等の架構法はIII期広間型の古い遺構に似ている。しかし喰違四間取型においても新しい遺構では大黒柱と下大黒柱が棟通りからずれる。だが、前述の不整形田字型のように長者柱と大黒柱・下大黒柱が桁行方向の同一線上に並ぶ例は19世紀中期の遺構1例だけであった。この型でも19世紀以降になると屋根裏を利用し、屋根の南面中央部を切りあげて赤城型の屋根となる。

喰違四間取型の古い遺構の特徴は前述した不整形田字型の古い遺構の特徴と類似点多く、しかも前稿のII期広間型あるいはIII期広間型の古い遺構の特徴とも類似点が極めて多い。このようなところから喰違四間取型は、不整形田字型と同様に、広間型から発展した形式であろうと推察する。

10. 田字型遺構について

10.1 平面 規模は梁間4.5~5.0間、桁行8.5~9.5間のものが最も多い。四間取遺構44棟中、17棟(約39%)が田字型であった(表-5)。このうちで古い遺構はNo. 9やNo. 10で、組頭・大名主等の村役人の家であった。そして建造年代は18世紀中頃のものと推定された。田字型の平面をみるとすべて長者柱・大黒柱・下大黒柱が桁行方向の同一線上に配置されている。しかもそのほとんどが棟通りからずれており、不整形田字型より古い遺構も見えていない。このような理由から田字型は、不整形田字型から発展したものと考えられる。たとえばNo. 9をとりあげてみると、ナンドとウラザシキは孫下屋(孫庇に当る)を除去すれば奥行1間半の室となり、No. 3やNo. 7のような不整形田字型になってしまう。このことから田字型は不整形田字型における裏側の奥行を増大し、前後の室の奥行を同一にとったことから生じた形式であるとみてよいであろう。

初期の田字型遺構ではNo. 14のように屋根裏を利用していないものもあった。しかし大多数の遺構は屋根裏を利用し屋根を赤城型にしている。また、田字型ではトコ・ワキドコをナンド(ヘヤ)にも設ける場合が多く、19世紀中頃以降になるとさらにナンド(ヘヤ)の妻側に縁側(ニシエン・ニシローカなどとよぶ)を設け、時には平書院まで備える家も見受け、いわゆる「曲り座敷」の機能を持つようになる。土間では板の間を大きく張り出しているのが目立ち、板の間の端にイロリを設け、この奥をオカッテとよぶ。

田字型でも不整形田字型でも19世紀以降に建造された遺構では、一般に4室すべてに畳を敷きつめるようになる。しかし土間寄りの2室は夏になると、現在でも畳をあげて板の間で用いるのが普通である。古い遺構では当初からチャノマ(ウチザシキ)に畳を敷かず、この室と土間との境を開放とし、建具で仕切らない遺構もある

(No. 9・10・14 など)。調査遺構によれば当地方の田字型は18世紀中頃から20世紀初頭頃まで建築された民家形式で、不整形田字型や喰違四間取型より遅れて出現した新しい形式であった。そして養蚕の影響を強く受けて、赤城型から草葺総2階造りへと発展している。

10.2 構造 17棟の田字型遺構のうち No. 14を除く16棟が屋根裏を利用していた。

表-7 田字型の屋根形式と屋根裏利用状況

屋根形式	屋根裏利用	棟数
入母屋	なし	1
前破風	あり	1
赤城型	あり	11
崩	あり	1
田字の平面型	あり	1
総2階	あり	2
合計	なし1, あり16	17

そして16棟のうち11棟(約70%)が赤城型であった(表-7)。また最初に赤城型の屋根がみられたのも田字型遺構であり、草葺総2階遺構も田字型にだけみられた。このようなところから田字型遺構は赤城型と共に発展し、養蚕の影響を強く受けた

群馬県養蚕農家の一典型とみてよいであろう。

ここで注記したいのは田字型遺構の場合、前稿のⅠ期広間型にみられたように長者柱・大黒柱・下大黒柱が梁行のほぼ中央で、桁行方向の同一線上に整然とたち並ぶので、平面的にこれをみる限り時代の差を見出しがたいことである。ましてⅠ期広間型において中古に間仕切の中柱を抜きとり、長者柱と大黒柱間に差鴨居を入れてザシキを前後の2室に区画している場合など、注意深く観察しないと田字型遺構と間違えてしまうところである。しかし、構造について注目すれば、Ⅰ期広間型と田字型との間に次のような違いを見出すことができる。即ち、長者柱・大黒柱・下大黒柱はⅠ期広間型の場合、棟通りに配置され、直接あるいは棟束で棟を支持する。しか

し、田字型遺構におけるそれら3本の柱位置は棟通りから裏側へずれており、棟束もないのが構造的に大きく異なる点である。

11. むすび

11.1 本稿では赤城南麓地方の広間型以降における一般農家(主に本百姓層)の平面と構造の変遷を考察したが、平面について広間型からの変遷過程を模式図で示すと図-7のようになる。調査遺構によればおよそ17世紀に溯る民家の平面形式は広間型に限られていた。しかし、18世紀に入ると不整形田字型や喰違四間取型が出現する。不整形田字型や喰違四間取型はともに広間型から発展したものと推察され、18世紀中頃になると、不整形田字型から田字型が生れる。喰違四間取型は主に山間部にみられ、少数ながらも明治に入ってから建造された。したがって18世紀中期以降になると不整形田字型・喰違四間取型・田字型の3者が混在し、それらの大多数は赤城型の採光方式をもつ養蚕農家の形態を表わす。そして田字型では明治中頃以降になると、草葺総2階の遺構も出現する。

11.2 構造 赤城南麓地方民家における広間型以降の構造の変遷過程を断面の模式図で示せば図-8のようになる。すでに明らかにしたように18世紀前期になると、広間型から不整形田字型や喰違四間取型が登場する。発生当初の不整形田字型とみられた古い遺構では、大黒柱と下大黒柱を棟通棟りにすえており、上屋柱の省略も少なく構造的にⅡ期広間型に近いものであった。しかしこれ以後の不整形田字型はこれまで棟通りにすえられた

図-7 赤城南麓民家における平面の発展模式図

図-8 赤城南麓民家における構造の発展模式図

大黒柱・下大黒を、Ⅱ期あるいはⅢ期広間型における長者柱の位置と桁行方向同一線上にずらしたものであらうと考えられた。このように大黒柱・下大黒柱を棟通りからはずして裏側へずらした大きな理由は、生活の向上による平面計画上の要求からきたものと推察された。したがってⅡ期広間型において長者柱が棟通りからずれた時と同様に、大黒柱・下大黒柱も平面の変化によって棟通りからずれたものと判断される。このように大黒柱・下大黒柱が従来その位置を堅く守ってきた棟通りからずれるということは、民家における平面計画が構造の制約から独立し、平面計画上ある程度自由な位置に柱を配置することを可能にしたものとして、構造的に大きな進展とみてよいであろう。下大黒柱が棟通りからずれたのは、下大黒柱と大黒柱間に梁が架けられるため、大黒柱のずれにしたがったまでであろう。故に 18 世紀中頃以降の不整形田字型および田字型では、平面的にみると屋内のほぼ中ほどに長者柱・大黒柱・下大黒柱が桁行方向に一直線となって配置される(図一7)。これに対し喰違四間取型の場合、その多くが大黒柱・下大黒柱を棟通りに配置しており(9棟中6棟、約 67%), No. 26 以外の 8 棟は長者柱と大黒柱を桁行方向の同一線上に並べていない。このようなどころから喰違四間取型は構造に後進性を残しているといえよう。このように喰違四間取型における大黒柱・下大黒柱の棟通りからのずれが遅れる大きな理由は、大黒柱が間仕切柱を兼ねなかったことによるものであらうと推察する。この他各形式とも柱の下に土台を入れるようになるのは 19 世紀中頃のことであり、これ以降の遺構ではほとんどすべて土台を用いている。

最後に本稿は関東支部第 40 回学術研究発表会(昭和 44 年 11 月)に発表した原稿を基礎資料にしている。しかしその後の反省もあってすべて再調査し、さらにその後調査した遺構を大幅に加えている。したがって支部発表論文と本稿との間に資料・考察とも異なる点を認める場合は、本稿の方が正確であることを特に注記しておきたい。

注

- 1) 宮沢智士「民家における書院的座敷の成立時期の 1 例(長野県南佐久郡八千穂村の場合)」日本建築学会論文報告集第 95 号, 昭和 39 年。

山田弘康「近世村方文書よりみた相模国三浦郡木古葉村の屋敷と家屋—その 1・その 2」日本建築学会論文報告集第 221・222 号, 昭和 49 年 7・8 月。

山田弘康「家別人別帳よりみた近世中期以降の越前民家—その 1~6」日本建築学会論文報告集第 238~240 号・242・250・251 号, 昭和 50 年 12 月~昭和 51 年 2 月・4 月・12 月・昭和 52 年 1 月。

佐藤 巧「近世武士住宅」叢文社, 昭和 54 年。

津田良樹「日光社参史料からみた享保 12 年の下野岩原村の民家について」・「日光社参史料からみた天保 13 年下野上横田村の民家について」・「日光社参史料からみた正徳年および安永 4 年の下野下横倉村の民家について」・「日光社参史料からみた享保 12 年の下野鶴田村の民家について」

日本建築学会大会学術講演梗概集, 昭和 50 年・51 年・52 年・55 年。

岡田真晴「日光社参史料からみた明和 7 年の下野上戸祭村の集落と家屋」日本建築学会大会学術講演梗概集, 昭和 56 年 9 月。

- 2) 神奈川県教育委員会編集発行「神奈川県における近世民家の変遷Ⅰ・Ⅱ」昭和 33 年 8 月, 同 38 年 3 月。
- 3) 林野全孝「大阪府を中心とする四間取民家の変遷と特質」日本建築学会論文報告集第 163 号, 昭和 44 年 9 月。
- 4) 関口欣也「埼玉県の民家」埼玉県教委発行, 昭和 47 年 3 月。
- 5) 一色文彦「茨城県の民家」日本建築学会民家小委員会民家シンポジウム。昭和 50 年 10 月。報告概要は建築雑誌 No. 1104, 1976 年 3 月に掲載されている。
- 6) 大河直躬「群馬・栃木・茨城・千葉の民家」建築と社会, 昭和 44 年 10 月。
- 7) 大河直躬「千葉県の民家Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」昭和 45 年 3 月, 同 47 年 3 月, 同 49 年 3 月。
- 8) 桑原 稔, 日本建築学会関東支部第 39 回学術研究発表会梗概集, 昭和 43 年 6 月。
- 9) 桑原 稔, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 昭和 44 年 8 月。
- 10) 桑原 稔, 日本建築学会関東支部第 40 回学術研究発表会梗概集, 昭和 44 年 11 月。
- 11) 桑原 稔, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 昭和 45 年 9 月。
- 12) 桑原 稔, 日本建築学会東海支部研究報告集第 8 号, 昭和 45 年 11 月。
- 13) 桑原 稔, 日本建築学会関東支部第 41 回学術研究発表会梗概集, 昭和 46 年 1 月。
- 14) 大河直躬著「群馬県の民家」群馬県教委発行, 昭和 46 年 3 月。
- 15) 桑原 稔, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 昭和 50 年 10 月。
- 16) 桑原 稔, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 昭和 51 年 10 月。
- 17) 桑原 稔, 村田敬一, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 昭和 54 年 9 月。
- 18) 桑原 稔, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 昭和 53 年 9 月。
- 19) 桑原 稔, 「古文書にみる本百姓民家の規模について」, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 昭和 49 年 10 月。
桑原 稔, 「古文書にみる本百姓民家の規模について(新嶋村の場合)」, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 昭和 55 年 9 月。
- 20) 民家の指定保存を目的として, 昭和 37 年度から毎年 1 県ずつ調査を始めた。しかしこの程度のことでは、破壊の速度に追いつかず、到底全国的見通しを得るのは困難とのことから, 昭和 41 年度より毎年 5 県ずつ調査を実施することになり, 昭和 49 年度で一応の終了をみた。
- 21) 大河直躬「現在の民家研究の方向」建築雑誌 No. 963, 1966 年 1 月号。
- 22) 桑原 稔, 「赤城南麓地方における平面と構造の年次的変遷について(No. 1)—広間型について—」日本建築学会論文報告集第 196 号, 昭和 47 年 6 月。
- 23) ザシキが訛ったものである。本稿では室の呼び名は当該遺構でよばれている発音を忠実にとりあげている。
- 24) 22) の p. 91「結び」参照。
- 25) 当地方の場合、一般にデエ(コザ)とナンド境に設けられているトコより、当遺構のようにデエ(コザ)の上手に設けられたトコの方が新しいトコの位置とされている。
- 26) 古老の話によれば、下から見あげると「川」の字のように梁が架けられているのでこのようによぶという。
- 27) 当地方では表側と裏側の室の奥行が同じ 4 間取の家を「田字の間取の家」とよぶが、ここでは「田字型」と仮称

する。

- 28) 地面から窓台までの高さは 1.8~2.0 尺位が多い。これは糸ひき道具の座繰り機械の高さに合せたものという。
- 29) 今和次郎「上州と甲州の民家」民俗芸術, 昭和 3 年 11 月によれば, このような形式の草屋根は特に赤城山麓地方に多くみられることから, 赤城型と命名している。
- 30) 赤城南麓地方で前破風造りを許されていたのは, 宮城村にある赤城神社神主の家, 旧荒砥村にある産泰神社神主の家, および当家の 3 軒だけだったという。
- 31) 当地方では床上表側の中柱を「ナカトバシラ」とよんでいる。
- 32) 現在は総 2 階造りにしているが, 昭和 5 年に改造したものという。
- 33) 写真 9 にみる外観は, 北部の中之条町を中心にした吾妻地方に集中的にみられる形式で, 地元では「前兜造り」と

よんでいる。昭和 45 年に国指定重文になった旧富沢家住宅は, この前兜造りの典型的な遺構である。

- 34) No. 10 のような大名主の遺構は例外とする。
- 35) 北橘村・富士見村・大間々町ではデエとよび, 宮城村・前橋市・玉村町・伊勢崎市ではコザとよんでいる(表-6)。
- 36) 床上のほぼ中央にたつ柱を“長者柱”とよぶ。
- 37) I 期広間型の場合も長者柱・大黒柱・下大黒柱が桁行方向の同一線上に並んでたてられた。しかし, その場合は必ず棟通りに据えられた。II 期・III 期広間型では長者柱と大黒・下大黒柱が喰い違って建てられ, 桁行方向の同一線上に並んでいない。
- 38) 子供が生れて 1 週間目に, 子供の名前を墨書した半紙を, この柱に貼る習慣があるので, ここから生じたよび名であるという。

SYNOPSIS

UDC : 72.03 : 728.6

STUDIES ON THE CHANGE OF THE TIMES ON THE PLANE AND STRUCTURE OF THE FARM HOUSES AT THE SOUTHERN DISTRICT OF MT. AKAGI (PART II)

—About the four-roomed farm houses—

by MINORU KUWAHARA, Professor of Toyota Technical College,
Member of A.I.J.

Giving the instances, I have being considered these development processes about “Hiroma” type which was the old type of afarm houses at the southern district of Mt. Akagi in my first study. In this study I am going to persuade chronologically the relation between the plane and the structure and make clear the formation of “Kuichigai-yoma-dori” type, “Huseikeitanzi” type and “Tanozi” type which were being developed as the farm houses type afterwards.